

「プラクティカルコロノスコーピー」第2版

岡本 平次 著

多田消化器クリニック院長

多 田 正 大

大腸内視鏡検査・治療に伴う合併症が増加している。4～5日に1回の割合でわが国のどこかの病院で、腸管穿孔が発生している(宇野良治、医科学 67: 289, 1997)とのことであるが、穿孔まで至らないにせよ、女性患者は検査中の腹痛はお産よりも辛いと訴えることもまれでない。

このような苦痛多い検査を安全で普遍的なものに変革したいという一念で、colonoscopy 名人として類まれな才能を有する岡本平次先生は1995年に労作「プラクティカルコロノスコーピー」を刊行した。この書籍は挿入法についての系統的な記述書が少なかった時代にあって、初心者にとってはわかりやすい手引書として、ベテランにはShinya氏の提唱する一人操作法を理解するための指標として、多くのcolonoscopistに愛読されてきた。名人は自分の裏技を他人に伝授することを好まないものであるし、必ずしも教え上手であるとは限らない。しかし岡本名人は本書の中に裏技を余すところなく記載し、しかも理解しやすい文章であったことから、読者には大変好評であったと聞いている。

岡本先生の提唱する挿入手技の基本そのものは、本書が刊行された6年前も今も変わるものではない。したがって書籍が完売すれば、その都度、増刷しておれば執筆者としての責任は果される。しかし最先端を走るパイオニアとしての意地からであろう、敢えて自らの名著に加筆して改訂版を発行したのが本書である。新しい書籍にせず、改訂版としたところに岡本先生の一徹さを汲み取ることができる。

第1版のどこが変わったのであろうか。同じような表紙の新旧の書籍を並べてみるとすぐに理解できる。第2版では単にファイバースコープの写真が電子内視鏡像にrenewalされただけではない。目次の項目は新旧ではほぼ同じであるが、記述内容は大きく改変されており、その結果、書籍のボリュームも増加している。インフォームドコンセント、検査前準備などの項は、昨今の医療紛争にも対応できる内容に改変されている。無床診療所で安全に日帰り検査・内視鏡治療を行うにはどうすればよいのか等々、大腸内視鏡検査が大病院で行う特殊検査ではなく、一般病院

や診療所でも安全に行えるルーチン検査であることを教えてくれる。挿入法の第一人者が、豊富な臨床経験に立脚して執筆した文章であるので説得力がある。随所に大腸内視鏡に関する伝導師として、著者の篤い思想が語られており好感がもてる。

したがって第2版といえども内容は大幅に改稿されており、新しい書籍が完成したと言っても過言ではない。第1版を読んだ人が第2版を購読しても、決して損をしないだけの充実した内容になっている。序文には著者の18年前のライブのスナップ写真が掲載されており、型破りな序文に驚かされるが、それほど著者の意思が前面に強く出ており、本書を読めばcolonoscopyの真髄に一步近付くことができるような期待を感じることができる。初心者にもベテランにも、読み甲斐のあるお勧めの一冊である。

● B5 頁 296 図 80 写真 22
カラー写真 286 色図 30 2001
定価(本体 19,000 円 + 税) 送料実
費

— 医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)